

## 集団就職の時代

東京での仕事あけの日、お茶の水から根津、谷中を歩きました。藍染川があり、関東の祭り用の幟を染めている染め物屋さんが根津にあったはず。そんな記憶を確かめたいと思っていました。

実際に歩いてみると、染め物屋さんがある雰囲気はまったくありません。藍染川は暗渠となり、蛇道と呼ばれる道になっていました。観光客も多く、工芸の町という雰囲気はありません。聞くとところによると、谷根千は人気スポットになっているそうですね。

ぶらぶらしていると、下町風俗展示館がありました。酒店の建物を移築し、店頭を再現しています。その庭先で、啖呵売に出会いました。万年筆の啖呵売とカミソリの泣売（なきばい）の実演。実際に売るのではなく芸としてやっておられます。ビートたけしや渥美清、綾小路きみまろのような語り口です。泣売は、少年・少女が脇役として登場。地方から出てきて働いている少年・少女です。親が危篤だから国に帰りたいが、雇い主に前借りを頼んでも借りることができない。腹たちまぎれに店の品物を持って出てきたという状況設定。なぜか、少年少女の出身地が青森となっています。泣いている少年・少女の事情を聞きながら、「みんなで買って、助けてやろうじゃないか」といって、カミソリや万年筆を売るというものです。

中嶋哲夫の

「人事も歩けば」



▲上野駅に佇む「あゝ上野駅」の歌碑

泣売を見ながら、昭和30年代の集団就職を思い出しました。中学卒で地方から集団就職列車に乗り、上野駅で雇主に迎えられて、住み込みで働く。その方々が、企業の現場を支え、夜間高校に通ったりしながら、技術を身につけ、信用を獲得して、起業する人も出てくる。起業をしないまでも、がっちり現場を守ってくれる。そんな人材が輩出されたわけです。その時代の心象風景が、「見上げてごらん夜の星を」「ヨイトマケの唄」「あゝ上野駅」などの歌なのでしょう。

気になったので、上野駅に行きました。「あゝ上野駅」の記念碑があります。描かれているのは蒸気機関車。歌っていたのは井沢八郎。「上野はおいらの心の駅だ。くじけちゃならない人生が あの日ここから始まった」。15歳にして退路を断った少年・少女のキャリアを調べてみたい気持ちになりました。

(MBO 実践支援センター代表)